

「聴講生」の花戸貴司 doctor に「お医者さんのインタビュー」についてコメント お願いしましたら。。。

なかなか奥深いテーマで簡単にコメントできそうにないことが発覚しました・・。

それでも私なりに考えている医療現場でのインタビューのことを書きます。

医療現場におけるインタビューは、学生時代に医療面接という「技法」を授業で学びます。

それは、

- ・患者さんから必要な情報を聞き出す
- ・患者－医療者関係の確立と患者感情への対応
- ・患者さんへの説明・教育と治療への動機づけ

という役割だそう。

技法のことはここでは書きませんが、患者さんから聞き出した情報を医療用語に翻訳し、診断に近づけようとする。

ここまでが医療者のインタビューですが、私はそれ以外のことも必要だと思っています。

つまり、こちらが必要とする医療情報というルールの上を流れていくのではなく、患者さんの物語を聴くこと。それは患者さんの生い立ち、価値観、心理面を理解することだけではありません。

医学の歴史を振り返ると、「健康」に影響する要因が外傷や感染症等の急性疾患や周産期管理が中心であった時代、医療の介入や公衆衛生活動が大きな役割を果たしました。

(この時代は「医療に従いなさい」という時代)

その後、慢性疾患の管理へ変化し、医療は生活指導という役割も担うようになります。

(医療者が患者さんに「指導する」時代。一応、目指すゴールは対話で決めましょう)

そして今、かつては医療の対象ではなかった、障がいや老い、認知症さらには貧困、孤独といった「状態」においても幅広く対応することを求められるようになっていきます。

(何が必要になるのか?)

上記のように今までは患者さんに医療情報を届け、生活面を指導することが大きな役割でした。しかし、「疾患」ではなく「状態」において大切なことは「当事者の声を聴く」ことだと思っています。

そのためには医療情報だけではなく、患者さんの物語、言葉、歴史を聴くことを大切にされるべきだと思っています。

私自身もまだまだ勉強しなければならないことがたくさんあります。

本講義の「インタビューの作法と極意」で、さらなることを学べるのではないかと期待しております。

リアルに聴講できないのが残念ですが、録画で拝見します。

はなちゃん、花戸貴司 doctor は、「終末期」を「人生の最終章」に変えた方です。